

今年度の目標として地域に属して生きていくことを目指していた。これまで関わってきた物事の上にこれ以降のひとつひとつが積み重ねられていくことを確信し、普段の事柄がこれまで以上に見えるように、と。その中の一つとして、自分の生活の手段というものを求めて岩沼市の職員採用試験に臨んだ。その結果は12月の半ばに告知された。2次試験不合格としてそれが示された。自分としても残念だったが、関わる多くの人が自身のことのように残念だと言ってくれた。そのことは人との関係が築かれているのだと感じて嬉しかったが、自分の目指していたことが閉ざされ、先が見えなくなったような気がした。岩沼という地に残って何かを為すのか、他の地で役目があるのか、自分には何ができるのだろうか、導き出すことができずにいた。

そのように悩む中で、岩沼市の臨時職員として同じ仕事場で関わった人と幾らか話す時間があり、その中で言われたことが自分の胸に深く刺さった。「残るか残らないかではなく、小寺くんが何をやりたいかでしょう。それを達成するのが難しいならば、これまで関係を築いてきた人達に甘えることを覚えないといけないんじゃないかな。」と。他にも色々と言葉を交わしたが、衝撃を与えられたのはこのような言葉だった。

その人はクリスチャンではないから、その甘えるべき関係というのは人間関係を指しているのだろうが、僕が感じたのは主との関係だった。僕は甘えたり求めたりするという行為が苦手な人間で、それは主に対しても同じだった。主に対する祈りは、基本的にボランティアという立場からの見方を優先し、僕個人の想いや願いは二の次としていた。今回の結果はそのことを主にたしなめられた様感じた。これまで岩沼で過ごした時が今という時に占めるものとして、ボランティアという立場は無視できないが、そこに意志が無ければ形式としてただあるだけに等しい。特にボランティア活動の規模が縮小しつつある今は、個人としてどうあるか、その意志の占める割合が大きくなる。どちらも大切であり、不可欠なものだ。これまで築いてきたことと同じくらいに、これから築いていきたい個人の想いを主に願っていかねばならない。そして、自分の想いを語るならば、これまであった物事がこれからの物事をどのように築いていくのか、それを見届けたいと同時に、その中の一部として、また隣人として叶うならば属していきたい、ということになる。

MSR+として、岩沼チャペルとして、僕自身としてこれまでに重ねてきたものは数多くある。それらを踏まえて岩沼の地で何を為したいのか、それはこれまであった活動での延長線上であるが、僕個人の意志としての問題もある。このことが自分の課題として意味することは、これまで希薄だった個人としての意志を、ボランティア活動などを通して築いた土台の上に据え置くことである。僕にとっての隣人とはどうあるものなのか、今一度考えなければ。その答えを主と人と向き合い、求めて行く。



田面に映る月。人も何かに移らないと自身に気付けない